

「昌益国際フェスティバル・八戸」を開催して

昌益記念実行委員会事務局長 三 浦 忠 司

昨年、平成四年一〇月一七日、八戸市公会堂において安藤昌益没後二三〇年・生誕二九〇年を記念して「昌益国際フェスティバル・八戸」を開催した。この大会は八戸歴史研究会を中心としながら、八戸市内の三〇余りの団体で構成する昌益記念実行委員会が開いたものである。

本大会のテーマは、江戸時代中期に八戸に居住していた安藤昌益の思想について、その思想の現代的意義を問い直そうというものである。題して「昌益と現代——自然と人間の調和をめざして」。要するに、反封建体制の思想家として著名な昌益の思想に一步踏み込んで、現代のエコロジ的な側面から光を当ててみようという試みである。

本大会の特色をあげると、地方都市八戸で開くものであるということと、民間で大会を企画し、運営したということ、そして、国際的広がりをもったものであるということである。

大会を開く場所は東京ではなく、八戸である。八戸で開くからには、八戸市民を対象としたものでなければならず、そのためには、何よりも市民が理解し、参加しうる市民レベルの大会でなければならぬ。

このような趣旨から大会名も、その実はシンポジウムであるが、フェスティバルと名づけたし、催し物もそれにふさわしいものとした。

まず、昌益一人芝居を演じて市民を昌益の入口に立たせ、国際的著名人のちよつと難しい講演を聞き、これを受けて作家の目を通して昌益論を軸にしなが、地元の人や外国人が参加するパネル・ディスカッションを展開するという組み立てにした。

実際、榎谷伸夫氏（劇団やませ代表）の昌益一人芝居は、南部弁で昌益を演じ、大会参加者の目をくぎ付けにした。シカゴ大学教授のテツオ・ナジタ氏（アメリカのアジア学会会長）の講演は、内容的には市民レベルを超えていたが、真摯な態度で一生懸命日本語で昌益思想を語ってくれたことは、一般市民に昌益思想の国際性を感じさせるに充分であった。パネル・ディスカッションは形上ひさし氏のタレント性もあって大変おもしろかった。昌益ファンの井上ひさし氏は独特の昌益論を提示し、これにパネリストや一般参加者が質疑応答して時間がたつのを忘れるほどであった。

勿論、一般参加者の議論そのものは、昌益思想の核心にせまるものは多くはなかった。しかし、パネリストと一般市民とが一体となって議論をたたかわせたことは市民参加の大会としては大成功といつてよい。大会参加者も、一、〇〇〇名はおろか、一、二〇〇名を越える人でにぎわ



なお金がかかった。この点がこの種のアカデミックな大会を開くにあたっての大きなネックである。

私達は八戸市からも助成金を貰ったが、それだけでは全く足りなかった。県内外の財団で助成できそうなところはくまなく回り、助成を依頼すると共に、地元の企業には無理を承知で協賛金をお願いした。こうして大会経費を捻出したのである。

また、大会が大きくなればなるほど、常設の事務局が必要である。私のように学校の教員ではとても対応できるものではない。そこで、八戸にはLOVE八戸運動で全国的に名を馳せた八戸青年会議所があり、ここに大会事務局をお願いした。八戸青年会議所は二〇年程前に昌益のスライドを作成し、市民運動として取り組んだ経緯があったから、心よく引き受けてくれた。

そして、入場券の販売から、大会当日の受付、大会の舞台の設定に至るまで、すべての大会運営を取り仕切ってくれた。地域のためとはいえ、大変ありがたかった。

た。

こういう団体に支えられて、一種の市民運動的な広がりをもってこの大会は実施されたのである。

当日の大会を振り返ってみよう。

昌益一人芝居「^{たけだ}出立つ日——高橋大和守出奔す」 梶谷伸夫

昌益の八戸の弟子の一人の高橋大和守が、昌益同様、八戸を出立して

った。このことは、一地域の実行委員会が電通などに頼らずに自ら企画・運営したことを考え合わせると、ひとつの驚きといつてよいと思われる。

ところで、一番頭を悩ませたのは大会経費である。アメリカからの講師の旅費、作家の講演料、大会ポスター・入場券・パンフレットなどの印刷費、電話などの通信費、どれをとっても日常生活とかけ離れた膨大

帰らなかった事情を戯曲化したものである。

続いて、

講演「忘れられた思想家を思いおこして——安藤昌益と近代の苦境」

テツオ・ナジタ

アメリカのノーマン研究、昌益思想の独自性と獨創性、日本の一八世紀思想の位置づけ、昌益の言語の革新性などを論じ、最後に、「安藤昌益は、私達に、批判的な思想と創造性を生み出すために私達がもっている場所という問題について考慮しています。昌益は、私達にさまざまな地域がもっている独自で創造的なエネルギーを思い起こさせてくれる。また、富と権力と専制君主のシンボルの中心からはるか遠くに位置するここ八戸のようなところの、地方性ももっている豊かな潜在能力を思い出させてくれます。」と結んだ。

そして、大会のメインのパネル・ディスカッションが行われた。

コーディネーター 工藤欣一（八戸歴史研究会会長）

パネリスト 井上ひさし（作家）、安永寿延（和光大学教授）、ジャック・ジョリ（英知大学教授）、稲葉克夫（田舎館村誌編さん事務局長）
ゲスト クラウス・ヴァイドネル（東京大学大学院）、レベッカ・ジェニスン（京都精華大学助教授）、アラン・ウォルフ（早稲田大学客員教授）

まず、問題提起は稲葉克夫氏から始まった。稲葉氏は昌益の生まれ故郷の大館周辺の文化的背景と昌益思想を受け入れた八戸の知識人の様相、南部藩の政治状況を述べた。

次いで、井上ひさし氏は、昌益の文字批判の正しさ、もの凄さについ

て論じた。

続いて、安永寿延氏は、昌益の禅僧から医師への転身、昌益のエコロジ思想の先駆性について述べた。

これに対して、ジャック・ジョリ氏は昌益のエコロジ思想を批判し、ルソーと昌益思想の相違について論じた。

ゲスト・コメンテーターのレベッカ・ジェニスン女史は、女性学の立場から昌益の女性観を述べ、アラン・ウォルフ氏は昌益の言語の反抗性について、クラウス・ヴァイドネル氏はエコロジの視点について論説した。

これらのパネリスト、ゲスト達の問題提起を受けて、パネリスト同士や大会参加者との討論に入った。

大会参加者の発言の主なものは、地球環境の破壊と昌益思想、昌益の「自然」のとらえ方、昌益の町おこしへの利用、一八世紀日本の知的世界などがあつた。

これらの議論は時間が足りないもので、翌日再度、場所を天聖寺に移して議論が続行された。天聖寺は、昌益が八戸に在住していたとき、講演を行ったゆかりの寺である。ここで、一般市民とパネリスト達のホット論議が再開された。

その主なものを紹介すると、昌益と現代のかかわり合い、昌益の自然観・人間観、環境破壊と連鎖、現代医学と昌益、ユートピア思想家からアリスト思想家か、商品経済拒否の論理、昌益の漁業のとらえ方、現代農業における視点、東北の風土と昌益・宮沢賢治、昌益の青年時代の思想形成、昌益の教育論、神山仙庵と「自然真営道」などなど、その討論

は多岐にわたっていた。

天聖寺大会の方は参加者が少なかった点で、論議も本格的であり、議論も専門的であった。

本大会と翌日の天聖寺大会の二日間のディスカッションを通してみると、各人が一見バラバラな意見を言い放っているようにみえる。しかし、全体的にみれば、昌益思想の種々な視点から現代社会をとらえ直すそうとしていたといえる。井上ひさし氏の言葉によれば、昌益というメカネによって現代の私達の社会をのぞき、そこからどのようなことを読みとるか、それが私達に課せられた課題であるということになる。

今回の大会参加者は、八戸市を中心としながら、遠く関東、関西にまでも及び、広範囲にわたっていることが特色である。それだけ昌益思想の現代での広がりが知られる。参加者の職業も、農業者や漁業者もいたし、商工業者、サラリーマン、専門家の学者や研究者、昌益と同じ医者、さらには自然食の実践家もいた。実に種々の人達が会場へ足を運んでくれた。いってみれば、地縁に関係なく、素人から玄人まで参画してくれた大会であった。大会参加者がすべて発言したわけではないが、これらの人々をすべて呑みこんだのが今回の昌益大会であった。

最後に、本大会の国際交流について触れよう。本大会は八戸で企画し、八戸で資金を集めて実施した八戸限りの大会であった。ところが、本大会が刺激になって、中国とアメリカで昌益大会が実施された。

昨年九月二二―二四日に中国の山東大学で「日中共同・安藤昌益シンポジウム」が開かれ、今年の三月二七日にはアメリカのアジア学会（ロスアンゼルス市）で昌益分科会、四月二―三日にはコーネル大学（ニュ

ーヨーク州イサカ市）で「安藤昌益アメリカ・シンポジウム」が開催された。

八戸大会は専門家の大会ではなかったが、一地方の大会で終ることなく、国際的関心を引き起こす呼び水になった点も見逃せない意義である。なお、本大会では幸いなことに若干の剰余金が出た。その剰余金をもとに安藤昌益基金を設立した。その趣旨は地方の研究者は金銭的に恵まれない人が多く、発表活動もままにならないのが現状である。そこで、昌益研究は勿論のこと、広く地方史研究を対象にしてそれらの調査研究と発表活動を助成しようというものである。基金の運営は八戸歴史研究会があたるが、今後、基金の資金力を強化し、その趣旨を全うしたいと思う。昌益そのものが地方にいながらその思索を深めた人であったことを考えると、基金の運営にあたっては充分その精神を生かしていきたい。

（みうら・ただし 青森県立八戸西高等学校教諭）